

# 文系出身者も ドボクを変えられる!

「取材協力者」

瀬尾 弘美氏

正会員 (株)建設技術研究所

長谷川 紗弓氏

(株)建設技術研究所

近年、土木の仕事や専門領域は一層広がりを持ち、多様な人材を歓迎するドボクへと変化している。本企画は、少し特殊な経歴や分野から関わりを持たれる土木技術者を紹介し、今後求められるドボクへの関わり方について考えたい。今回は、文系学部出身で建設コンサルタントに就職された、瀬尾弘美氏と長谷川紗弓氏にお話を伺った。文系出身者から見るドボクとは。



写真1 会社での様子【社内研修の表彰式】(長谷川紗弓氏提供)

## 文系学部から ドボク技術者へ

土木業界に興味を持ったきっかけを教えてください

**長谷川**——私は経済学部出身ですが、大学生の頃にゼミの先生からの紹介で、現在所属している交通システム部でアルバイトをしたことが、土木業界を知るきっかけとなりました。アルバイトでは、交通量調査の結果集計や委



長谷川 紗弓氏  
HASEGAWA Sayumi

日本大学経済学部卒業後、2019年(株)建設技術研究所入社、交通システム部に配属。交通事故対策業務、渋滞対策業務、自転車活用推進計画策定支援業務などに携わる。



瀬尾 弘美氏  
SEO Hiromi

駒澤大学文学部地理学科卒業後、1990年(株)建設技術研究所に入社、河川環境計画業務に従事。2013年から管理系部門に異動後、現在は管理本部人事部次長兼ダイバーシティ推進室長。土木学会ではD&I推進委員会委員。

員会の資料作りの手伝いなどを行っていました。そのときに、社員の方が作られた資料や考えられている様子を見て、自分で考えてものを作ることは面白そうだと感じました。また、元々都市計画に興味を持っており、まちづくりやインフラ整備に携わりたいとも考えていました。

**瀬尾**——私は地理学科出身で、卒論を書いているときに地図を見ながら何に興味があるのか考えていました。地理学科では、地形図の変遷を勉強するのですが、特に川が大きく変わっている

ことに疑問を持ちました。自由に流れていた川がまっすぐにされて、川の気持ちになつてみるとこれで満足なのか…?と思う、河川環境を自分なりに考えることができる仕事を探していたところ、知人から今の会社を紹介されて入社しました。

——大学時代と入社後でギャップはありましたか

**長谷川**——アルバイトで会社のことを教えていただいたので、ギャップは少なかったです。文系でも理系でも勉強しないと分からないような部分が



写真2 新入社員の頃の業務【川の流量観測】(瀬尾弘美氏提供)

多く、専門的な知識が必要な場合は上長の方に指導いただいたため、文系だから困るということはなかったです。

瀬尾——一番ギャップに思ったことは、元から苦手意識があった計算やプログラミングです。逆に、自分の強みは文章を書くことなので、報告書を書くときに自分の考えを表現することはできました。最初は分からないことだらけで、自分は価値がない人間だと自信を失う瞬間がありました。自分の強みを少しずつでも発揮しながら、自分で自分の居場所に価値を認め、周りの人に理解してもらうことができる

### 多様な人を受け入れる ドボク業界

と、会社全体に良い影響を与えることができず。理系の人だらけの環境の中に、少し異なる考え方をしている人が入ることで会社が活性化することもあると考えるようになりました。

——土木業界で文系が活躍できる場はありますか

瀬尾——まだ少ないように感じます。しかし、文系・理系を問わず大学で勉強したことを仕事に直接生かせることは少なく、仕事を始めると興味が変わることもあるので、社会インフラを良くしたいという

気持ちをもとに持つことが大切です。社会学や地理学が土木に関係しているのはもちろん、経済学はインフラに関係していますし、歴史学を学んでいたならば歴史的に物事を見る力も生かされます。社員を募集するときに「土木学生歓迎」と書かれています。そこを取り除いて誰でも歓迎にすれば、さまざまな人に来てもら

られる可能性があります。

——ダイバーシティ推進担当として文系人材に対して実践していることはありますか

瀬尾——女性、外国出身者、シニア、障害者の方に向けた活動はしています。文系の方に合わせた活動は不十分です。しかし、外見から分かる違いではなく、見た目では分からない価値観の違いはそれぞれ持っていて、文系・理系も価値観や得意なことが違うので、「私はここにいていいんだ」と思えるような会社になりたいと思っています。例えば、人の価値観はさまざま

あり、希望する働き方も多様なので、それを認めましょうという制度は作りつつあります。また、双方で理解し合うにはコミュニケーションが大事なので、普段から話し合えるようにコミュニケーション研修を行っています。

——文系のこれからの可能性をどのように期待されていますか

瀬尾・長谷川——社会インフラは、あらゆる分野の専門家を生かしてくれる懐の深さや幅の広さがあると思います。住民とのワークショップでは、土木の専門知識を持っていない方でも、生活者の視点から多くのアイデアが出てき

ました。土木は世の中の基盤を作っているという点で誰でも参入しやすいため、さまざまな分野の人が集まり、それぞれの専門を生かしていけると、さらに良い社会基盤整備ができそうです。

### お話を伺って

土木分野は文系の方が携わっているイメージがなく、文系の方には難しい印象を持っていました。しかし、土木は全ての人の生活に欠かせない幅広い分野だからこそ、誰でも参入することができる気がされました。文系・理系にかかわらず、それぞれの専門の特性や得意なことを取り入れることで、多様な人々に土木への関心を高めていただけることを期待しています。そして私たちも、大学で学んでいる専門分野に固執せず、他分野について学べる機会には積極的に参加し、自分が新たに勉強したことをどう生かせるか考えていきたいと思っています。最後に、今回取材に快く対応いただいた瀬尾弘美様、長谷川紗弓様に心より感謝申し上げます。

(担当編集委員：橋本美月、浅野太我、中尾優文)